

福井支部ニュース

2024年度 第1号

日本科学者会議福井支部

連絡先：山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

◆第54回総会・2024年度第1回幹事会の概要報告 (山根 清志)

◆書籍評論『自壊する欧米／ガザ危機が問うダブルスタンダード』
内藤正典・三牧聖子 著、集英社新書 (小野 一)

◆本の紹介とマスコミ時評『なぜ日本は原発を止められないのか?』
青木美希 著 文春新書 (小倉 久和)

【報告】福井支部 第54回総会・2024年度第1回幹事会

5月11日(土)に14:00から、福井県国際交流会館2階第1会議室において、標記総会がZoomとYouTubeも併用する形で開催された。

≪記念講演≫

総会前半で、川村信治氏が「勝山市の中学校再編計画反対運動の検証から『民主主義における科学』を考える」と題して記念講演を行った。

勝山市において、2018年に唐突に出てきた中学再編計画は、3つの市立中学校を1校だけにして、それを県立勝山高校の敷地内に併置するというものである。これに対し、「勝山市の教育の未来を考える会」がつくられ検討と活動が始まったのだが、それが、勝山市の中学校再編計画非同意の活動、市の中学校再編計画反対運動、である。為政者(市長、教育長)は、議

会を通ったのですすめているというが、議会に対しても市民に対しても偽りを重ねての議決である。また、強行するために、偽りと隠蔽に市民が声を挙げるのを封じて、「あきらめさせる」ための宣伝がなされている。そうした中で当面の課題は、一つは再編計画の凍結(撤回)であり、もう一つは民主的な市政の回復であることである。そして、勝山市の策謀が初等・中等教育を弱体化させ民主主義を破壊するものであること、が強調された。

≪福井支部第54回総会(議事概略)≫

1、議長選出

冒頭、山本事務局長から議長への立候補者が問われたが、立候補謝がなく、山本事務局長から、由田昭治会員を推薦したい旨提案があり、異論無く全会一致で承認した。以後は、由田議長により議案書に沿って議事が進められた。

2、議案の審議

まず、この第53期の活動報告について、提案・審議された。

- ・第53期活動報告
- ・決算報告(会計監査委員寺岡英男氏による2024/5/2付け会計監査報告書が添付)

伊藤事務局次長が、議案書の内容に従って説明提案をおこなった。これを承けて、議長が、出席者にそれらに対する質問・意見を問うたが、特段質問や意見は出されず。拍手での承認となった。

次いで、次期の第54期活動計画と、次期支部人事として幹事会メンバーと会計監査委員の提案があり、審議された。

- ・第54期活動計画
- ・予算
- ・人事(会計監査委員も含む)の提案

引き続き伊藤事務局次長が、議案書の内容に従って、これらについての説明・提案をおこなった。いずれについても特に異論はなく承認された。

なお、第54期活動計画に関しては、[4]全国及び北陸地区その他の活動、の(1)支部間の交流・共同活動を継続する、(2)北陸地区合同シ

ンポジウム2025年の共催、に続いて、第(3)項として「(3)「全国原発シンポ2024 福井」(略称)について、JSA 原子力問題研究委員会とJSA 福井支部で実行委員会を設置して取り組む。」が追加された。

最後に、日本科学者会議の総会(第55回定期大会)の大会議案の審議および定期大会の代議員選出を行った。

- ・ 日本科学者会議第55回定期大会議案の審議
- ・ 定期大会代議員の選出

山本雅彦事務局長から説明・提案があった。事前に幹事会で議論していたこともあり、総会では特段質問、意見は出なかった。定期大会代議員として山本雅彦氏が、代議員補欠に小野一氏がそれぞれ提案され、異論なく承認された。

以上の終了を以て、由田氏の議長からの解任となった。いつもながら手際よい議事進行ぶりであった。

《福井支部2024年度第1回幹事会》

総会終了後、同会場で引き続いて2024年度第1回幹事会が開催された。議論すべきは、総会で決まった人事を承けての任務分担である。

山本事務局長から、前年度同様の任務分担が提案され、承認された。なお、1つの任務担当については担当予定幹事から決定を留保して欲しいと申し出があり、その任務の担当については次回の幹事会で改めて検討することとなった。

第2回幹事会は6月3日(月)18:00~ Zoomで開催することとなった。

(山根 清志)

2024年前期の会費納入をお願いします

2024年前期の会費納入をお願いします。過去の未納会費がある会員は、分割納入でも構いませんので、至急納入をお願いします。

【書評】『自壊する欧米／ガザ危機が問うダブルスタンダード』

内藤正典・三牧聖子 著、集英社新書 2024/4/17

わずか1ヵ月くらいの間に2万人以上(住民の1%)が軍事作戦の犠牲となり命を落とす。国際法上のジェノサイド(大量殺戮)に該当するか否か以前に、許されざる異常事態である。だがそれを見て見ぬふりするなら、口先では正義やタテマエ論を振りかざしていても、結果的に戦争犯罪の片棒を担ぎ、私たちの隣人を苦しめる戦禍を拡大させることにならないか。これは空想でも過去の話でもない。現在進行中の事態である。

2023年10月7日、パレスチナのガザ地区を実効支配するイスラム勢力「ハマス」が、イスラエルに大規模なロケット攻撃を仕掛けた。これ自体は非難されるべきテロ行為だが、一側面だけ強調するとことの本質を見誤る。1948年のユダヤ人国家(イスラエル)建国以来、先住のパレスチナ人は塗炭の苦しみを味わってきたが、それを凝縮したのが「ヨルダン川西岸」と「ガザ地区」である。「10・7」への報復として、イスラエルはガザへの空爆を開始した。戦闘がエスカレートする中、世界有数の人口密集地ガザ地区の惨状は筆舌に尽くしがたい。国連のグテーレス事務総長が訴えたように、ハマスの犯罪は許せないが、イスラエルが自衛権の範囲をはるかに超えてガザ市民(女性や子どもも含む)を集団的に罰することもできないはずである。2024年1月、南アフリカはオランダのハーグにある国際司法裁判所(ICJ)にイスラエルによるジェノサイドを提訴した。グローバルサウスの国々に支持が広がったのとは対称的に、欧米諸国は得てして冷淡だっ



た。とりわけ、明確にイスラエル寄りの立場をとったアメリカやドイツの動きが際立っていた。

このような中緊急出版されたのが、本書である。内藤正典は、トルコをはじめ中東諸国や（イスラム）難民問題に造詣の深い社会学研究者で、序章「イスラエル・ハマス戦争という世界の亀裂」を執筆。権威主義国家と目されがちなトルコ（大統領はエルドアン）が理性的な外交を展開し、潜在的には和平の仲介国となり得ることなど、日本ではあまり紹介されない視点を提示する。それに続く第1章「欧米のダブルスタンダードを考える」と第2章「世界秩序の行方」は、内藤が三牧聖子（国際政治学者）と対談した記録を元にしたものである。三牧の執筆する終章「リベラルが崩壊する時代のモラル・コンパスを求めて」は必読。アメリカ政治外交研究を専門とする三牧は、シオニズム（パレスチナにユダヤ人国家を建設する運動）主義者であるバイデン大統領の眼中にパレスチナは存在しないこと、一部のフェミニズム運動が女性の権利擁護の名の下にイスラエルの軍事行動を事実上容認しイスラム女性の命を軽視することなどを、批判的に検証する。閉塞感漂う現状ではあるが、若い世代を中心に「ジェノサイドに抗するもう一つのアメリカ」という動きがあることも見落としてはならない。

パレスチナ問題の根は深く、問題解決は容易でない。だが、本書でむしろ印象的なのは、欧米における世論や思想の劣化（本書の言葉ではダブルスタンダード）であり、それに無批判に追随する日本外交の問題性である。対談の中で内藤が言う「そういうこと（反ユダヤ主義はダメだが、反イスラムなら抵抗が少ない）が起きてしまっているっていうことに対して、ヨーロッパ研究をしてきた人たちは、もう少し「愕然」とした方がよいのではないかという気持ちがありますね」（232頁）という言葉は、ショッキングである。私もドイツ政治研究者の端くれだから。戦後ドイツでは、ナチス時代のホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）への反省から、反ユダヤ主義は許されなかった。だが、ガザ地区でイスラエルがしていることを批判するのは、それとは全く別のことである。パレスチナに少しでも好意的なことを言えば「反ユダヤ主義」と同一視される風潮は、非常に危険である。

良識の府であるはずのアカデミズムの世界でも、事態は深刻である。三牧の文章から引用しておこう。「本来ガザ危機においてもっとも活発に発言し、この問題についての理解に貢献すべき中東研究者ですら、政治的・社会的圧力を強く感じ、「自己検閲」に走りつつある。・・・より詳細に、どのような局面で「自己検閲」の必要性をもっとも感じるかという質問に対しては、81%が「イスラエルを批判する時」と答え、「パレスチナを批判する時」は11%、「アメリカの政策を批判する時」は2%にとどまった。この数字を見る限り、「大学キャンパスでは、イスラエルに不当な、親パレスチナの言説ばかりが許容され、蔓延している」という議員たちの主張とは真逆の言説状況がある。中東に関する専門的な知識を持つ人々でも、キャンパス内外からのさまざまな圧力を恐れて、イスラエル批判をしにくくなっていると感じているのだ」（258頁）。

ガザ危機により露見された欧米社会のダブルスタンダード。だがそれを「対岸の火事」のように眺めていてよいのだろうか。難民受け入れに慎重な日本が、ウクライナ戦争では難民に門戸を開いた。しかしパレスチナ問題には無関心なばかりか、イスラエル寄りの欧米に追随している。命の重さに民族による違いはない。反ユダヤ主義を許してはならないのと同様に、パレスチナで人権が蹂躪されるのも許してはならないのである。

（小野 一）

支部ニュースへの寄稿・投稿を

支部ニュースを支部会員間の交流の場とするため、積極的な寄稿・投稿をお願いします。

◆ジャーナル評論：「日本の科学者」「福井の科学者」の評論

◆時事評論、意見・見解

◆活動報告・経験報告・事例紹介

◆行事案内、会員への案内・お知らせ

その他、エッセー、書評、文芸作品の紹介など、何でも支部ニュース担当者までメールでお送り下さい。yamane@f-edu.u-fukui.ac.jp
ogura@u-fukui.ac.jp

[本の紹介とマスコミ時評]

『なぜ日本は原発を止められないのか?』

青木美希著 文春新書 2023/11/20

本書の冒頭の「はじめに」で、著者は、「汚染水」の海洋放出に対して「漁業者のほかにも、反対の声を上げる人たちがいた。日本科学者会議が（中略）海洋放出に反対し、タンクの増設による長期保管を求める声明を出した」と書いていた。関連するテーマの本はいくつか読んだが、JSAの声明に触れていたのは初めての経験である。JSAの末席の会員にとっては嬉しい記述であった。それはさておき、本題はその後の記述である。①「事故をひとたび起こせば取り返しのつかない事態を招くにもかかわらず、原発はなぜこうも優先されるのか。どうして、何のために必要とされているのか。その理由を解き明かすには、歴史を俯瞰し、考えてみなければならない。」②「本書は、私が記者として勤めてきた3つの報道機関の社益を離れ、30年かけて一人の人間として聞き歩いてきた、その集大成である。」と書いていることである。

引用の前半部分①は、本書のタイトルになった内容の「まえがき」である。第1章「復興の現状」、第2章「原子力専門家の疑問」、から始まって、第3章「原発は何故始まったか」、第4章「原子力ムラの人々」、第5章「原発と核兵器」、第6章「作られる新たな「安全神話」」で、綿密な取材・調査活動や文献調査を行っている。湯川秀樹先生（第3章）や澤田昭二先生（第5章）など評者が学生時代に直接間接に薫陶を受けた先人たちの言動なども調べて紹介していたのには大変感謝した。引用部分の後半②は、最後に触れる。

第4章で具体的に触れられている「原子力ムラ」では、『**3.11 大津波の対策を邪魔した男たち**』島崎邦彦著 青志社（2022/4）とは

異なった、ジャーナリストの立場と視点で論じ批評している。評者は、『**東京電力の変節－最高裁・司法エリートとの癒着と原発被災者攻撃**』後藤秀典著 旬報社（2023/8）を読んで「司法」の中枢までもがムラに参画しているのを知って驚愕したが、本書の第4章では、大手マスコミもムラに寄り添って（忖度・参画して）いることを指摘している。今度の都知事選で再び注目を浴びている『**女帝 小池百合子**』石井妙子著 文藝春秋（2020/5、文春文庫版2023/11）では、大手マスコミは権力者の垂れ流す情報を取上げて持ち上げるが、裏付け調査による報道はしない、という実態があらさまに示されている。ジャニーズ性被害問題の忖度と全く同じ構造だ。

国境なき記者団の2024 報道の自由度ランキングで日本は70位だ。安倍政権以降のこの10年は70位前後でウロウロしている。首相との会食や記者クラブ・番記者制度をはじめ多くの問題や要改善点が指摘されているが、改善の兆しが全くない。むしろ、COVID-19以降は権力側への忖度も強まっている。つい先日、文科省からNHKに「（教師の）定額働かせ放題」との放送は偏ったものである、という「抗議文書」を送りHPにも掲載したが、NHK側からの反論はない。<https://www.change.org/p/...>

最後に、引用した「はじめに」の後半部分②について、評者は下線部分に少し引っ掛かった。本書の奥付にある著者の略歴には、青木氏は「最初に入社した北海タイムスが休刊となり、北海道新聞に入社、そして2010年9月全国紙に入社」とある。なぜ「全国紙」なのか。ネットで探すと直ぐ「朝日新聞」と知れるのに。疑問は本書の「おわりに」を読んで氷解する。本書は2年余り前にほぼ完成していたが、会社の上層部から出版を止められていて、2年の抵抗の後、本には所属社名と職名を明示しないなどという約束で出版されたそう。これで思い出した本がある。『**いじめの聖域 キリスト教学校の闇に挑んだ両親の全記録**』石川陽一著 文藝春秋（2022/11）だ。石川氏は共同通信の記者で、長崎支所に在籍していた時、私立の名門・海星学園高校のいじめ自殺問題で、各方面に取材し遺族の了解の下にこの本を出版した。本の中で、県庁と教育委員会が高校側に忖度して自殺の真相究明を阻み、それを忖度した長崎新聞の報道姿勢を批判的に記述した。共同通信東京本社が契約社の長崎新聞に忖度し、石川氏に出版本の回収と増刷禁止を強要、彼は退社して、[現在、報道の自由裁判を闘っている\(ネット参照\)](#)。

（小倉 久和）